

伝統的なものの機能
——フッサールの伝統概念について——
小島 雅史（一橋大学大学院）

我々は日常的に、伝統的に維持されているものに触れる。一方で、人によっては伝統に対し、歴史的に研鑽を受けた肯定的価値観として受け取る場合がある。他方で、伝統的価値観に寄りかかり独善的態度や排他的態度を取る人間と対峙した経験がある人は、伝統を否定的にとらえるだろう。従って、伝統的なものへの評価付けは時に非常に困難を伴う。こうした問題意識から、本報告では、第一に、そもそも伝統は我々の経験において如何に機能するものであるのかを明らかにし、第二に、伝統に対して我々がどういった態度を取るべきかという問題に答えることを目的とする。この目的のため、本報告では、伝統に関するフッサールの議論を参照して、伝統の持つ規範的側面と否定的側面について検討する。

まず、フッサールの議論を追い、伝統が生活世界における我々の実践に関して規範的な役割を果たすことを明らかにする。生活世界は、我々の経験によって獲得された諸々の意味付けに即した妥当性の連関であり、それ故に、主観の経験に即した存在意味を持つ世界である。生活世界においては、諸個人は、互いの人格の連携によって、文化を産む。文化は、過去の世代の連鎖の中で間主観的に保持された目的や価値付けに即して構成され、対象把握の一定の条件として機能する。というのも、我々は経験の連続の中で常に次の状況に対する予期を持つが、この予期を支えるのが、共同体内での馴染みの行為の型を与える文化だからである。従って、各個人は、自身の文化内で成立している伝統を、世代を超えて通用してきた規範として、信頼性をもって受け取る。かくして、諸対象や諸行為の意味が歴史的に引き継がれ続けることをフッサールは「伝統化」と名付ける。

しかし、伝統としての文化は、否定的な側面も持っている。第一に、それが規範であるが故に、逸脱を許さない。フッサールは、伝統に基づく規範に従う者が、伝統からの逸脱者に対して感情的な拒否感を抱きうる点に注意を向ける。また、他文化、即ち故郷の世界 *Heimwelt* に対する異郷世界 *Fremdwelt* にある文化に対しては、伝統は時に有害な先入見として働く。第二に、フッサールは、『経験と判断』において、現在の経験から直観された判断は、過去のものになるにつれて、一つの対象として自立化しうると述べる。これは判断の習慣化を生み、いわば伝統的な把握を生む事態を表してもいるのだが、他方で、判断の根拠が見失われる可能性が示唆されている。

以上の伝統の二側面からは、伝統は、限界を持った行動規範として機能すると言える。この限界は、否定的な側面が現れる場面で露わになるが、同時にそれは自身の共同体の持つ伝統の変様可能性でもある。我々が伝統を肯定的にとらえ続けられるものとするためには、かえって他のものとの接触の経験を、伝統の持つ新たな妥当性を獲得する機会としてとらえる必要があるのではないだろうか。